〈一般の部　優秀賞・U30賞〉

柿ばあとの約束

秋山　瑞葉

高校生のとき「柿ばあ」と名付けて慕う女性がいた。今考えてみれば失礼甚だしいが、現代文の担当教諭のことである。干し柿のように小さく萎んだ、しわしわのお婆ちゃんだから、というのがあだ名の由来だ。

柿ばあは、よく生徒に作文の課題を出した。題は、政治に望む事から初恋の思い出に至るまでいろいろだった。私は内気な性格で本ばかり読んでいたので、それが奏功したのか文章を書くことだけは得意だった。初めて柿ばあが出した課題の原稿枚数の、倍量の作文を書いたほどである。柿ばあは私の作文に、いつも手厳しい批評を添えた。文の最後に「次も楽しみにしています」との決まり文句も。互いに読書好きなこともあり、いつしか図書室で遭えば軽口を交わし本を薦めあうような、気のおけない間柄になっていった。

秋口になると進路を問われるようになり、私は思い惑った。文章を書くことも、本を読むことも好きだった。大学に進学して、国文学や社会学をもっと学びたい。柿ばあは私の希望を聞くなり、顔をくしゃくしゃにして喜び、遅くまで大学探しに協力してくれた。私の中で「好き」が「夢」へと色を変えつつあった。

しかし現実はそれほど甘くなかった。成績が抜きん出ているのは国語だけで、他は散々だったのだ。「好き」というだけで進学していいものなのか。私の家は兄妹も多く、裕福でもないので更に気が引けて、結局卒業後は就職との結論を出した。

柿ばあへの報告は心苦しかった。柿ばあは「頑張ってね」と力なく微笑んだあと、激しい咳をした。その頃からだと思う。柿ばあの咳は恒常的になり、しわしわの顔には常にマスクが着けられるようになった。

卒業前の最後の授業の日、柿ばあは作文の課題を出した。題は夢。夢を諦めた私には書きたいことなど浮かばず、それを見ていた柿ばあは言った。

「提出は卒業式の日でいいですよ。あなたの最後の作文、楽しみにしています」

式の前夜、原稿用紙を前に柿ばあのことを考えた。少女のように頬を染めて、好きな作家の話をしてくれた柿ばあ。私の文章を、いつも楽しみにしていると言ってくれた柿ばあ。

「私は、文章を書くことが好きです」

一行目にそう書き出すと、もう筆が止まらなかった。素敵な文章を書いて、それを柿ばあや多くの人に読んでもらいたい。たくさん本を読み、学び、色んな国や街を旅して、それをまた文章にしたい。筆先から夢が迸った。

ふと、壁に掛けた漆黒のスーツが視界の端に映り、筆が止まった。現実に夢を笑われた気がして、急いで消しゴムを掴む。就職して、結婚して、子供を生み育て、老後は穏やかに。国文学も社会学も顔を出さない、嘘ばかりの夢を並べ立てると、原稿用紙が灰色に染まった。

式の後、職員室へ赴いた。柿ばあに宿題を提出すると、彼女は私に椅子を勧め、原稿用紙の束を捲りはじめた。二人の間に静寂が漂い、背に緊張感が走る。

約束があります。柿ばあは宿題を読み終えたあと、私の目を真っ直ぐ見つめて言った。
「あなたは、一生文章を書きなさい」
心臓が、ドクンと大きく跳ねたのを覚えている。柿ばあは見透かしていたのだ。違う進路を選んでも、消えない私の夢を。
「本当の夢は消しゴムでは消せません。本気である限り、布を被せても光るものです」
その光を、大切にしてください。そう告げた柿ばあの目が赤く潤んでいて、私は堪えきれずうつむいた。柿ばあへの感謝が目尻からこぼれて、制服のスカートにシミを作った。そして私は、柿ばあの顔を隠す大きなマスクを、肺を蝕む病を、心から憎いと思った。

「私は一生文章を書くから、柿ばあは一生、生きてね」
あの日、職員室の片隅で交わしたそんな支離滅裂な約束を、私は今でも胸に掲げている。

柿ばあ。私は約束を守り、今もこうして文章を書いています、きっと死ぬまで。
柿ばあ、元気ですか。生きていますか。約束を破ったら承知しませんよ。

今度、そんな手紙を出してみようと思う。柿ばあは顔をくしゃくしゃにして笑ってくれるだろうか。その顔にマスクが無いことを、心から祈っている。